

検査Ⅰ

時間 四十五分

受検上の注意

1. 解答用紙に、受検番号・氏名を記入してください。
2. 声を出して読むはいけません。
3. 解答は、解答用紙の所定のところに記入してください。
方法を誤ると得点になりません。
4. 終了の合図とともに、解答用紙を提出してください。

郁文館中学校

1 次の文章1、文章2はともに日本の哲学者である鷺田清一による評論の一部である。2つの文章を読み、後の問いに答えなさい。
(※印の付いている言葉には、本文のあとに「注」があります。)

文章1

しばらく前に、石川県のとある公立高校で、「考える」ということについて、生徒さんたちに向けて語ったことがある。講演を聴いたひとりの女子生徒が書いてくれた感想文のなかにこんな文章があった――

「哲学は、人間の本质について深く疑問に思った時や、そのことによつて悩んだり傷ついたりした時に、それを解決する手がかりをつかむための一つの手段なのではないか、と思いました。」

さつと読んだかぎりでは哲学についてよくありそうな印象を記しているようにもみえるが、そのなかにある言い回しにわたしは釘づけになった。「解決する手がかりをつかむ」という箇所だ。問いに対する答えではなく、その「手がかり」を掴むための哲学があるらしい、というのである。

政治や経済においても、育児や介護にあつても、さらには芸術表現に際しても、不確定な状況のなかでどうするのがよいかわからな

いまま、とりあえず事にあたるしかない。正しい答えが一つだけあるわけではないし、みなを満足させられる答えがあるわけでもないし、そもそもこれからじぶんが知ろうとしていること、創ろうとしているものがあらかじめわかっているわけでもない。答えがすぐには出ない。あるいは答えが複数ありうる、いや答えがあるかどうかよくわからない、そんな問題群がわたしたちの人生や社会生活を取り巻いている。そんなときにたいせつなことは、わからないけれどこれは大事ということを掴むこと、そしてそのわからないものからわからないままに正確に対処できるということ、いいかえると、

※性急に答えを出そうとするのではなくて、答えがまだ出ていないという無呼吸の状態にできるだけ長く持ち堪えられるような知的耐性を身につけることだ、というふうな話をしたのだが、聴いた生徒さんがそれをこんなふうにとまどめてくれるとは想像もしていなかった。そしてとてもすてきな捉え返しだと思った。というのも、哲学の重要な仕事として、問いの構造じたいを問いなおすということ、ア問題となつていくことがらへの視点、ないしはアプローチの仕方を吟味するところがあるからである。

(鷺田清一『哲学の使い方』による)

〔注〕

※ 性急：気が短くせっかちなこと。また、そのさま。

※ 吟味：物事を念入りに調べること。

文章2

無力な状態から脱し、自分の問題を自分で考えて、責任を負うことができるようになるために、私たちは、「一つの問いに一つの答えがある」という考え方をやめなければならぬ。物事は、こちらからはこう見えるが、後ろから見ればこんなふうだ、といういろいろな補助線を引きながら考えよう。みんなが一方からしか考えられなくなっているときに、別の方向から見ることがたいせつだ。例えば、自分の苦しみを打ち明けて絶望する友人に対して、いやそれだけでは無い、こういう考え方もある、と別の補助線を示せる「頼れるやつ」になろう。

自分の生きていく意味を考え、思い悩むこともあるだろう。問いが大きすぎて、※ 知的体力が足りずにだれもが倒れそうになってしまふ。そのとき、行き詰った思考回路をひっくり返せるかが肝心だ。糸口はたくさんある。

普段、自分が「生まれる」という言葉を使う。考えが進まないときに、「ところでこの言葉はほんとうに正しいのだろうか」と、本

題の外に立ってほしい。すると、生を自分の出来事のように語るのが、よく考えればこれは受け身の言葉であることに気づくだろう。つまり「生まれる」ということは自分だけではなく他人との間に起こった出来事なのだ、少し視野が広がる。相手の身になって問いを考え直すと、歯が立たないと思った問いも、少し違う見え方になるはずだ。文学や芸術作品も、同じ苦しみの中から生み出されたものだから、いろいろな補助線を与えてくれるはずだ。

それから、投げ出さずに考え続ける、いわば知的な肺活量を持ってほしい。理解はあるとき一瞬でできることは決してなく、じつと考え続けて到達できるものだ。それだけでなく、考えるうちにまったく別の、※ のつびきならない問題が現れてきて、そのことによつて他の問題も全部問い直さなければいけない、ということもしよつちゆうだ。哲学という学問がまさにその連続なのだ。私もある問いを突き詰めていたとき、突然世界がめくれ返って、「これがわからない」ということはあの問題はわかってるつもりだったが、実は根拠がなかったんだ」と、すべての問題をもう一度考え直す、ということもあつた。

なぜ生きているのか、自分の存在は何なのかという大問題に、答えはない。大昔からみんな考え続けていまだ答えられていないのだから。例えば、心と体の関係はギリシャ以来、二〇〇〇年以上哲学者が考え続けていて、いまだその答えは出ていない。それでも大昔からその問題に食らいついて問い続けてきた。その結果として、

ろいろな思想や芸術が生まれ、文化が豊かになってきた。たいせつなのは、問いつけることにある。

(鷲田清一『何のために「学ぶ」のか』『賢く』あるということ』による)

〔注〕

※ 知的体力：ねばり強く考え続ける力。

※ のつびきならない：身動きが取れない。どうしようもない。

〔問題1〕^ア問題となつてゐることがらへの視点、ないしはアプロ

ーチの仕方を吟味する^{ぎんみ}とありますが、それは具体的にどうすることでしょうか。また、そうすることでのような効果もたらされるでしょうか。〔文章2〕から探し出し、四十字以上五十字以内で答えなさい。(、や、も字数に数えます。)

〔問題2〕

いろいろな思想や芸術が生まれ、文化が豊かになってきたとありますが、それを実現するにはどのようにすることが必要でしょうか。〔文章1〕から探し出し、解答らん^{らん}に合うように四十字以上五十字以内で答えなさい。(、や、も字数に数えます。)

〔問題3〕

下に示すのは文章1と文章2を読んだ後の、花子さん^{はなこ}とある友達のやりとりです。このやりとりの後、花^{はな}子さんが示したと思われる考えを、四百字以上四百六

十字以内で書きなさい。ただし、下の条件と次ページの「きまり」にしたがうこと。

花子— 文章1と文章2を読んで、哲学に対して女子生徒が「手

がかりをつかむための一つの手段」と表現したのは本当にその通りだと理解することができました。

友達— たしかに、休憩しながらゆっくり考え続けることは大切

だと思います。しかし、それ以上にテストや学校の勉強のように素早く正確に答えを出すことが大切だと考えます。

花子— それは鷲田さんの主張とは論点がずれていると思います

ね。

それに私はこの文章を読んで、何か問題に突き当たった際には二つのことを意識しようと考えました。

友達— そうですか。花子さんの考えを詳しく教えてください。

条件 次の三段落構成にまとめて書くこと。

① 第一段落では、友達の発言において本文と論点がずれている

点を二つ指摘する。

②第二段落では、①で示した点がなぜずれているのか、

文章1と文章2にもとづいて説明する。

③第三段落では、花子さんが問題に突き当たった場合、何を意識しようとしていると考えられるか。①と②を踏まえて花子さんが意識しようとしていることを書く。

〔きまり〕

○題名は書きません。

○各段落の最初の文字は一字下げて書きます。

○行をかえるのは、段落をかえるときだけとします。

○、や。や。や。などもそれぞれ字数に数えます。これら記号が行の先頭に来るときには、前の行の最後の字と同じますめに書きます。(ますめの下に書いてもかまいません。)

○。と。が続く場合には、同じますめに書いてもかまいません。この場合、「。で一字と数えます。

○段落をかえたときの残りのますめは、字数として数えます。

○最後の段落のますめは、字数として数えません。